

# 機能要件と構造変動仮説

## ～構造-機能分析の identity crisis～

恒松 直幸 橋爪大三郎 志田基与師

機能論の発想によって社会変動を論ずるなら、それはかならず社会システムに対する機能評価(順序づけ)ととりわけ関連させて、社会構造が変動していく様態を特定しようとするものとなる。ところがこうした議論の内実を、その概念構成や論理構造にときほぐし、つぶさに検討してえた結論によると、この試みは不毛である。構造-機能分析流の変動理論がそれなりの独自性を保つようにみえるのは、それが理論としてなお未完成的なあいだに限られ、いったん十分な説明力をえようとして厳密化をはかるや、たちまち相互関連分析に吸収されてしまうことが論証される。このように構造変動仮説を致命的な難点とするため、構造-機能分析が社会の一般理論として成功することはおよそ不可能と判明する。なお本稿は紙幅を節約するため大幅に略記号を採用したが、論文末尾にその一覧を掲げておいた。

### 1. 構造-機能分析の再検討

構造-機能分析(Structural-Functional Analysis: 略称SFA)の方法は、「単独で、現代社会学における通常科学(normal science)の地位を占めるに到った」(直井[1973: 32])といわれる。

直井[1973: 31]によれば、SFAは、(1)一般理論の意義をひろく認めさせ、(2)研究者間に共通の言語を提供し、経験的知識の集大成・問題の整理・新たな仮説の提示という一般理論の目的を達成し、(3)社会学における方法論・一般的方針・公準・概念・経験的一般化および理論について、社会学者間にコンセンサスを確立した。とすれば、現在SFAが学界で主導的な役割をはたしていることは、疑いようがない。

しかし、SFAが学界に確たる地歩を固めることと、それが十分信ずるに足る科学的手続きであることとは、必ずしも一致しない。科学においては、多数を占めることは方法の正しさを弁証しない。

1個の方法が、通常科学として制度化され実りを結ぶようになるのは、その方法が十分に納得できる論理をもつかたちに彫琢されたときのみである。SFAの方法に含まれるさまざまな問題に十分な検討を与えぬまま、なしくず的に1個のparadigmとして制度化されることがあってはならない。われわれのみるところ、SFAの方法にたいして与えられた検討はまだ不十分であって、より一層の議論がこれをめぐって行われる必要がある。<sup>(1)</sup>

さて、それではそうした検討はどのように行われるべきであろうか。

直井[1973: 33]は、SFAを1個のparadigmであるとしたうえで、その中に「方法論、一般的方針、概念、分類、公準、経験的一般化、理論などのすべての要素」を含めている。直井がこれらのタームで何を意味しているのか、またそれら相互の関係がどうなっているのかは、われわれにはわからない。しかし、SFAの方法を検討するのに、それらのすべてを検討することが必要か。

ある方法が通常科学として制度化されて実りを結ぶのは、一にかかってそれがもつ一般的な概念操作の手続き、すなわち、「論理」、「考え方」、「説明形式」とよばれるものによっている。<sup>(2)</sup>

その理由は以下のとおり。(1)そうした手続きは、具体的に1個の理論を構成するとき、現象を記述する枠組の影響を受けない。記述の枠組は個々の理論によってさまざまに変動する。何を対象にするか、観測は微視的か巨視的か、観測期間の長短、観測の精度等々によって記述の枠組はみなことなる。しかし、それらの差異を超えて、共通の手続きが存在するゆえ、1個のparadigmたりうる。(2)そうした手続きは、個々の理論の特定の仮説よりも一般的である。経験的に(直接ないし、間接に)検証(ないし反証)されるべき仮説は、反証のあがったとき棄却され新たな仮説におきかわる。しかし、次々と置きかわる仮説にたいして、仮説をうみだす方針として、また仮説を操作する方針として、この手続きは一般性をもっている。それゆえ、(1)、(2)より、SFAの方法が社会学者の集団に1個のparadigmとして採用されているとすれば、そのアイデンティティは、この手続きにこそまとめられるべきである。

SFAが通常科学であるならば、研究者間に広くその手続きがうけいれられており、しかるのちに直井のいうような種々の領域にわたるコンセンサスが確立されるはずである。

というわけで、われわれがSFAの方法を検討する際にはとりわけSFAのもっている一般的な概念操作の手続き、すなわち、「論理」、「考え方」、「説明形式」とよばれるものに焦点をあてるのがよい。

この小論は、SFAの手続きの再検討のこころみの1つとして、SFAの「構造変動仮説」(Structural Change Hypothesis: 略称

SCH)をとりあげ批判を加える。われわれはこの作業をいくつかの明確な前提のもとに行うことにする。それらの前提はすべて十分に納得しうるものであるが、われわれのえた結論はSFTのSCHをみとめがたいとする。

- (1) SFAの立場から書かれた書物・論文は数多いが、SFAの方法を要領よくまとめたものは少ない。青井(編)[1974]および富永・塩原(編)[1975]は、そうした数少ない試みではあるが、SFAの方法を十全に伝えてくれるものとはいえない。むしろ、SFAの理論としてはそれぞれ立派なものではあるけれども。
- (2) このように、種々の理論から共通の手続きのみを抽象したものおよび方は種々さまざまである。「論理」は小室[1974]の、「考え方」も小室(口頭)の、「説明形式」は志田[1979]、[1980]の用語法である。

### 2. 構造-機能理論と構造変動仮説

#### SFAの拡張小室版

はじめにSFAの方法を、とくに「構造変動」のとりあつかいに焦点をあてて整理をしていくこととする。

従来社会学におけるSFAといえば、T. Parsonsの諸業績([1951=1974], [1961=1978], [1954]等)を中心にして語られることが多かった。なるほどParsonsこそが社会学におけるSFAの創始者であり、常に精力的な展開者であった。しかし、ここではParsonsの業績に直接は触れることなく、Parsonsを含めて彼以降の諸研究者が展開してきたSFAの手続きのみに注目する。

その理由は以下のとおり。(1)すでに述べたように、われわれの関心は個々の理論にあるので

はなく、それらから抽象される手続きにある。(2) Parsons の諸業績もまたそうした理論のうち1個である。(3) Parsons の理論は内容が難解であり、解釈も種々にわかれている<sup>(1)</sup>。そうした問題にタッチすることは、本稿の目的からいって適切でない。(4) Parsons の受容以降日本で独自に発展したSFAの流れも存在する<sup>(2)</sup>。以上のような理由から、SFAにはParsons以外の異本が存在し、Parsons版のSFAのみを対象にすることは、必ずしもSFA全体にたいする検討とはならない。

われわれが検討の対象とするSFAは、なんらかのテキストによるものではなく、SFAの方法に従って理想的に構成された、一種の理論のひながたである構造-機能理論(Structural-Functional Theory: 略称SFT)の体系である。SFTはSFAの一般的な手続きをとりこんで、可能なかぎり整合的にくみだてられているとする。これは実際に理論を構成する際に生ずる種々の困難を、解決されたものとしてすべて捨象し、SFAの一般的な手続きの骨格を明示する論理的構成物である。

このSFTを対象とすることによって、われわれはSFAの方法をより直截に批判することができる。またSFAと同時に存在するが、SFAの一般的な概念操作の手続きには無関係な理論的言明を区別することもできる<sup>(3)</sup>。

このようにSFAの手続きにのみ注目することによって整理を行うことはほとんどなされていない。多くの研究者にとって、SFAの手続きとそれによって構成される理論とは不可分のものとされている。しかし、われわれはそうしたところがすでに小室[1974]によってなされていることを見出す。

われわれの提出するSFT、つまりSFAの方法を理想的に体现するものは、直接的に小室

[1974]の業績に負っている。小室は関連諸領域の成果(とりわけ近代経済学)をふまえた上で、SFAの方法をそれまでとは比較にならぬほど精密化した。その彫琢の方向は、小室のいうSFAの「論理」をきたえあげる側へとむいていたから、われわれのころみも小室の業績の延長上に位置づけられる。SFTは小室の定式化をふまえたうえで、これに若干の拡張を行ってえられた。それゆえ、SFTは、SFAの「拡張小室版」(Extended Komuro Version: 略称EKV)とでもいうべきものである。

ではEKVのSFTとはどんなものであろうか。

SFAへとつらなっていく機能分析、ないし機能主義には種々の系譜があるが、それらを整理すると大きく2つの考え方にまとめることができる。

第1の系譜は、社会学者が研究の対象とする社会に生ずる個々の事象(祭儀や組織や法律などをそれら単独でとらえるのではなく、共時的に生ずる他の諸事象との関連でとらえようとするものである。社会の中で生ずるありとあらゆる事象は、独立なものではなく、互いに関連しあう、この関連を無視しては社会現象の複雑性にとうてい迫りえない。そこでこの事象の関連体を全体として対象にするのでなければならぬ。こうした考え方を、相互関連分析の考え方とよぼう。

第2の系譜は、第1のもの同様社会事象の全体性に注目するが、その注目のしかたは全く別である。ある事象が社会全体にたいしてはたす「貢献」がどのようなものであるかを分析する。個々の事象の存在理由は、それが全体にたいしてはたす「貢献」によってあきらかにされる。全体は存続するために、個々の事象にたいして「貢献」をもとめるからである。この目的論的

な考え方を、機能要件(Functional Requirement: 略称FR)分析の考え方とよぼう。

SFAはこの2つの考え方をふたつながらうけついでいる。SFAの理想的なひながたであるEKVのSFTにおいて、この2種類の考え方はどう接合されるのか。端的にいって、EKVのSFTにおいては、この2つは全く水準のことなる説明原理として採用され、理論は2層をなした、いわば「2階建て」のような体裁をとるものとされる。以下簡単に紹介しよう。

### 一般均衡理論

相互関連分析の考え方はSFTの第1の段階を形成する。簡単にいって、この段階は「社会状態を社会構造によって説明する」ものである。

相互関連分析の考え方は、諸事象の複雑な相互関連体に一挙に解決を与えようとするものである。このような試みに成功した例として、近代経済学における一般均衡理論(General Equilibrium Theory: 略称GET)があげられる。小室は、SFAの論理をGETの枠組を用いて再構成した。そこでわれわれも、この第1の段階をGETとよぶ。以下GETについて簡単に説明する。

社会に生ずる種々の事象の全体(いろいろな事柄の組み合わせ)は、互いに関連しあういくつかの変数の組として記述される。この組を社会状態とよび、 $x$ であらすことにする。社会状態を $m$ 個の変数を用いて記述するとすれば、次のようになる。

$$x = (x_1, x_2, x_3, \dots, x_m) \quad \textcircled{1}$$

変数 $x_k$ の値がつくる集合を $X_k$ とすれば、社会状態は、 $X_1 \sim X_m$ のはる直積集合 $X$ の要素としてあらわされる。この直積集合 $X$ を社会状態空間とよぶ。

$$x \in X = \prod_{k=1}^m X_k \quad \textcircled{2}$$

観察され、記述された社会状態はすべて上の $X$ の要素として値をもつ。社会状態空間は論理的に出現可能なすべての社会状態を含んだものと想定されている。

このとき、社会学的な説明とは、 $X$ の要素である特定の $x^1$ (すなわちある特定の社会状態)がなぜ出現したのかを論理的にあきらかにすることである。

そのために考えられたのが「社会構造」の概念である。「社会構造」の概念は、社会学の歴史においては、簡単にいってある社会のなりたちを規定するものを意味してきた。変数の間に連関があるとき、個々の変数はかってに値をとるのではなく、他の変数の値に依存して値をとるようになる。そうした依存関係は、社会状態空間 $X$ にたいする制約(部分集合のわりあて)となる。これはいくつかの変数が特定の法則(lawないしrule)にしたがって変化することを意味し、また座標平面にたいしてグラフが制約になっていることを拡張したものと同一である。

いくつかの制約(それらは上で述べたように、その社会で通用する法則である)が $X$ に課せられると、その部分集合の交わりがちょうど単元集合(要素がただ1個のみ)になる<sup>(4)</sup>。この制約の組こそは、社会をちょうどそのようになりたせる、ということによって社会構造とよばれる。このことは $m$ 個の未知数の解を定めるのに $m$ 本の方程式が必要とされるのと同様である。

いま、 $l$ 個の制約が社会状態を1個に定めるとするならば、それら $X$ の部分集合である制約 $S_1 \sim S_l$ を1組として社会構造 $\omega$ としよう。

$$\omega = (S_1, S_2, \dots, S_l) \quad \textcircled{3}$$

説明されるべき社会状態  $x^1$  は、 $\mathcal{S}$  の成分である  $S_1 \sim S_l$  の交わりの要素とされる。

$$\bigcap_{k=1}^l S_k = \{ x^1 \} \quad (4)$$

つまり、社会状態は構造の与える均衡値として説明されるのである。

そのような構造  $\mathcal{S}$  の集合を構造空間  $S$  とよぶ。

### 構造変動仮説

FR分析の考え方は、SFTの第2の段階を形成する。この段階は社会構造をFRによって説明するものである。それゆえSFTの説明は最終的にFRにかかっている。しかもFR分析は、GETとは一応独立したものであり、GETの上にFR分析をたてるところにSFAの著しい特徴がある。

このSFAの特徴は、すでに述べたように目的論的な考え方をする点であり、もともとは「全体」にたいする「部分」の「貢献」を問題にするものであった。しかし相互連関分析をとりこんだ場合、「部分」の「貢献」を独立してとりだし、分析することはできず、<sup>(5)</sup>「全体」にたいする「全体」自身の「貢献」を分析することとなる。つまり、ありとあらゆる事柄の組たる社会状態  $x$  が、社会にたいしてどんな「貢献」をなすのかを分析する。

この「貢献」とは、社会のもつ「要請にこたえる」こと、あるいは社会の「目的を達成する」こと、すなわち「FRを満足する」ことである。そして、「FRを満足する」ことは社会構造の変動と関連させられている。それが構造変動仮説(SCH)とよばれるものである。

単純素朴には次のように述べられる。

#### 1 a (素朴なSCH)

構造  $\mathcal{S}^1$  は、それがもたらす社会状態  $x^1$

がFRを十分に満足するとき維持され、そうでないとき変動する。

この主張の第1点は、十分にFRを満足するような社会状態をもたらす構造は維持されるというものである。<sup>(6)</sup>維持される構造ばかりを集めてできる部分構造空間を許容域(Acceptable Domain: 略称AD)とよぶことにしよう。

第2の主張点は、構造がADにない(それがもたらす社会状態が十分にはFRを満足しない)とき、その構造は変動するというものである。

この主張が明らかに素朴なものにとどまっている点については多くを述べる必要がないであろう。なぜならば、(1)構造がADにある／ないということは、FRを十分に満足する／しないということであるが、そもそもそれはなにを意味するのか、(2)上の主張は、ADにない構造がどんな変動を示すのか全く明らかにしない。

第1の問題については、志田[1979]、[1980]にしたがって、FRの存在を、社会状態空間  $X$  で定義される弱順序の存在に等しいとみなすことにする。<sup>(7)</sup>

FRが存在するという事は、社会状態をその「貢献」に応じて「よい／悪い」と評価することである。評価の形式的側面を抽象すると、それはよいものから悪いものへと序列をつけることといえる。この順序づけということがFRが存在するという事の内実と考えざるをえない。

#### 2 a (弱順序)

$X \times X$  で定義される二項関係の部分集合  $R$  が次の性質をみたすとき弱順序という。

(1) 反射律

$$\forall x^1 \in X / (x^1, x^1) \in R$$

(2) 推移律

$$\begin{aligned} & \forall x^1, x^2, x^3 \in X / \\ & (x^1, x^2) \in R \wedge (x^2, x^3) \in R \\ & \rightarrow (x^1, x^3) \in R \end{aligned}$$

(3) 連結律

$$\begin{aligned} & \forall x^1, x^2 \in X / \\ & (x^1, x^2) \in R \vee (x^2, x^1) \in R \end{aligned}$$

弱順序の存在は、社会状態を、良いものから悪いものへと順番をつけてならべたことに等しい。社会状態を良いほうから一定の幅をとって、それに対応する構造部分空間をADとすればよい。なぜならば、構造は社会状態を一意にわりあてるから、 $X$  に弱順序をわりあてることは、構造空間  $S$  に弱順序をわりあてることになるから。

ただし、われわれは簡単のために構造空間  $S$  に与えられるものは弱順序ではなく線型順序であるとす。これは、構造変動について議論する場合でも本質を失わない単純化である。<sup>(8)</sup>

#### 3 a (線型順序)

$S \times S$  で定義される二項関係の部分集合  $L$  が次の性質をみたすとき線型順序という。

(1) 反対称律

$$\begin{aligned} & \forall \mathcal{S}^1, \mathcal{S}^2 \in S / \\ & (\mathcal{S}^1, \mathcal{S}^2) \in L \wedge (\mathcal{S}^2, \mathcal{S}^1) \in L \\ & \rightarrow \mathcal{S}^1 = \mathcal{S}^2 \end{aligned}$$

(2) 推移律

(3) 連結律

次に問題となるのは、ADにない構造がどう変動するかということである。これは次節以下で展開することとする。

#### 簡潔性の規準

SFTのSCHを検討する前に、理論一般に

たいする1個の規準を定めておこう。

科学理論の窮極の目的が現象に統一的で合理的な説明を与えるものであることは疑いがなく、しかし、もし同等の説明を与える理論ならば、われわれはより簡潔なものをとるべきである。これは「オッカムのかみそり」<sup>(9)</sup>として知られていることがらである。

#### 4 a (簡潔性の規準)

理論は説明を行うのに冗長な部分をもってはならない。

#### 本節のまとめ

この節ではEKVのSFTの組立てを簡単にみわたしたわけであるが、とくに構造変動のとりあつかいに焦点をあてるならば、問題は、FRの存在(すなわち構造空間  $S$  に与えられた線型順序)と構造変動の方向がどう関係しているかということであった。

- (1) たとえば、彼の代表的な業績であるAGIL図式は、そのそれぞれの内容が何を意味するのか研究者間で意見のわかれるところである。
- (2) 富永健一[1965]、吉田民人[1974]、小室直樹[1974]、廣瀬和子[1970]等の諸業績は、SFAの理論を一層充実させるものである。
- (3) われわれの定式化をみれば、SFAの一般的手続きは、必ずしも「行為論」の枠組をとる必要はないことがあきらかとなる。
- (4) この仮定はかなりきつものである。しかし、SFAの方針にしたがって理論が「理想的に」構成されたならば、それは一義的な説明になるはずであり、この仮定はSFTを強化する方向にはたらこう。
- (5) 小室[1974]の「限界機能(marginal fun-

ction)の考え方は、部分の「貢献」を相互連関を考慮してとりだそうとするものである。しかし、「限界機能」も、相互連関の中にある「部分」を問題にするのであって、「部分」の貢献を独立してとりだすわけではない。

- (6) 「FRを満足する」ことが構造維持のための必要条件と考えられていた。
- (7) さらに詳しく述べれば、FRをいくつ仮設しようとも、結局のところ社会状態空間に1個の弱順序が存在するのと同じであることがいえる。これは、志田[1979]、[1980]によって、厚生経済学におけるArrowの「一般可能性定理」(Arrow [1963=1977])を用いて論証される。それゆえ、われわれはこれ以後、FRの存在がXに与えられた1個の弱順序の存在と同値であるとして議論をすすめる。
- (8) 構造空間Sに与えられた弱順序は、Sを無差別関係によって類別している。そこで無差別関係による商集合をとれば、そこに線型順序が与えられたのと等しくなる。FRが弱順序におきかえられていたが、SFTにおいて互いに無差別な構造は、FR的に等価であるということによって同じとりあつかいを受けるはずである。それゆえ、この仮定は本質を失わない単純化といえる。
- (9) 原語は次のとおり。Entia praeter necessitem non esse multiplicanda : 存在は必要がなければ増加させるべきではない(Bunge [1959=1972:196])。

### 3. 構造変動の一般理論

#### 構造変動記述の枠組

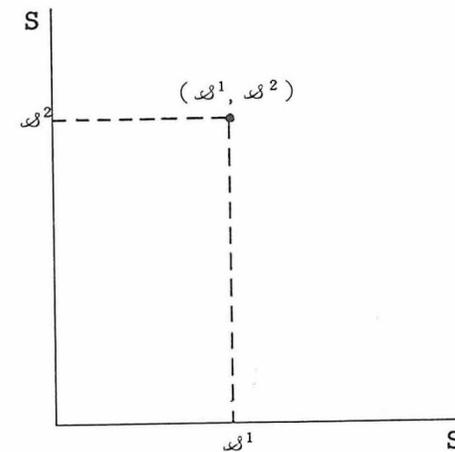
ここでは、社会構造記述の枠組である構造空間Sは完璧なものと仮定する。社会構造の変動について一般的な主張をなそうとすれば、完璧

に網羅的な構造空間Sが必要とされる。Sはすでに出現し観測された社会構造はもとより、いまだ出現はしていないが、論理的には出現を想定しうる、ありとあらゆる社会構造を要素として属させねばならない。つまり可能な社会構造のありようをすべて尽したものとされる。このように完璧に、かつ網羅的にSを構成することは、それ自体で非常な難事業といわねばならない。しかし、すでに述べたように、われわれはSFTをそうした記述の枠組から独立したものとみなした。Sの完璧な網羅性を仮定しても、SFTのSCHの定式化にとって有利にこそなれ、不利になることはない。

それゆえ、すべての社会構造 $\omega$ は、構造空間Sの要素である。これを確認しておこう。

社会構造の変動は、この集合Sの直積集合S×Sの要素として記述できる。構造変動とは、ある構造が別の構造におきかわる(自分自身におきかわる、つまり維持される)ことである。たとえば、ある社会システムがはじめ $\omega^1$ の構造をもち、 $\omega^2$ の構造に変動したとする。Sは完璧に網羅的であったから、 $\omega^1$ も $\omega^2$ もSに属する。 $\omega^1$ から $\omega^2$ への変動を $(\omega^1, \omega^2)$ とあらわすことにすれば、 $(\omega^1, \omega^2)$ はS×Sの要素であり、SからSへの対応であるどんな構造変動もこうして表示できる。Sが構造の記述枠組であったように、S×Sが構造変動の記述枠組である。

これを簡単に図示するならば、第1図を得る。ここではSを一定の長さの線分をもってあらわす。任意の構造はこの線分上の一点としてあらわされる。変動が生ずる以前の構造を横軸に、変動ののち生じた新構造をたて軸にとると、 $(\omega^1, \omega^2)$ なる構造変動は、このダイアグラム内の一点として表示される。説明のためにこのダイアグラムも随時用いることにしよう。たとえば、



第1図：社会構造変動の記述枠組

継続的に生じる構造変動は、S×Sの部分集合 $\{(\omega^1, \omega^2), (\omega^2, \omega^3), (\omega^3, \omega^4)\}$ のように記述でき、このダイアグラム内のいくつかの点として表示される。

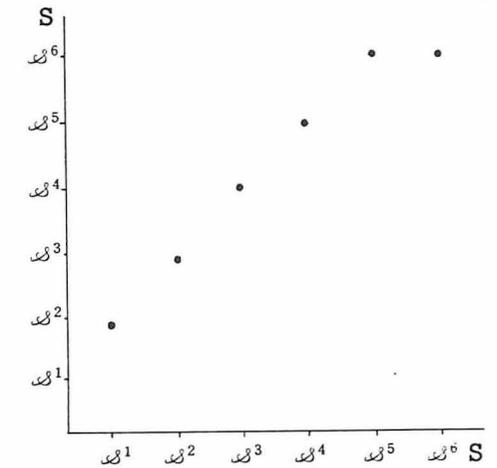
#### 構造変動の一般理論

SFTをはじめとして、社会構造の変動を一般的にとりあつかおうとする理論的な試みはいくつかある。それらの試みは、構造変動のとりあつかいについてみな共通の基準をもっている。はじめに例をあげて説明しよう。

Marx主義の理論では、生産関係に着目することによって、次の6つの歴史的発展段階を区別している。すなわち、原始共産制、古代奴隷制、封建制、資本主義、社会主義および共産主義である。これらを順に $\omega^1, \omega^2, \omega^3, \omega^4, \omega^5, \omega^6$ と記号的に表現しよう。この理論においては社会構造はこの6つによって尽くされているから、 $S = \{\omega^1, \omega^2, \omega^3, \omega^4, \omega^5, \omega^6\}$ となる。

人類の歴史、われわれの言い方では社会構造の継続的な変動は、階級闘争によって展開され、

$\{(\omega^1, \omega^2), (\omega^2, \omega^3), (\omega^3, \omega^4), (\omega^4, \omega^5), (\omega^5, \omega^6), (\omega^6, \omega^6)\}$ という形で生ずると主張される(これをダイアグラムで表示すると第2図となる)。すなわち、



第2図：Marx主義の構造変動仮説

原始共産制は古代奴隷制へ、古代奴隷制は封建制へと。

およそ構造変動に関する一般的な主張であれば、それが十分に明確であるとき、この例のように、個別的な変動 $(\omega^i, \omega^j)$ の集合、すなわちS×Sの部分集合としての表現をもつ。

しかし、このMarx主義の理論の例は、変動の一般理論を構成する上でさらに重要ないくつかの要請を提示している。

まず第1に、一般的な構造変動の理論であるならば、Sの要素となるどんな社会構造にたいしても(それ自身を含む)なんらかの社会構造をわりあてなければならない。原始共産制が古代奴隷制に移行することは主張しても、古代奴隷制が(維持されるのか否かをも含めて)どうなるのか主張しえないとしたら、一般的な構造変動論としては破綻なのである。

一般的な構造変動の主張はS×Sの部分集合

として表現されたが、これをあらためて、社会構造変動の法則(Law of Structural Change: 略称SCL)とよぶ。SCLはSからSへの対応であったが、第1の要請は、SCLがSの全域で定義されることである。

5 a ( 全域的変動 )

SCLは構造空間Sに属する任意の構造にたいして、Sに属するなんらかの構造をわりあてる。

一般的なSCLは、どんな構造にもなんらかの構造をわりあてなければならない(もちろん、同一の構造をわりあてる、すなわち構造を維持する場合も許される)。これはきわめて妥当なことである。

ところが、すべての構造になにかしら構造をわりあてるとしても、それだけでは真に理論的であるといえない。原始共産制にたいして、古代奴隷制も封建制もわりあてられているとしたらどうか。変動の原動力である階級闘争は大した説明力をもたないことになり、Marx主義の理論は少なくとも説明や予測ではなくなる。

そこで第2に、構造空間Sの任意の要素にはただ1個のSの要素がわりあてられる、と要請しなければならない。

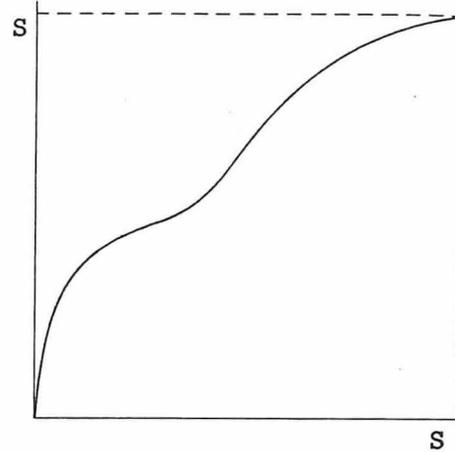
6 a ( 一意性 )

SCLは、Sに属する任意の構造にたいして、Sに属する要素を1個のみわりあてる。

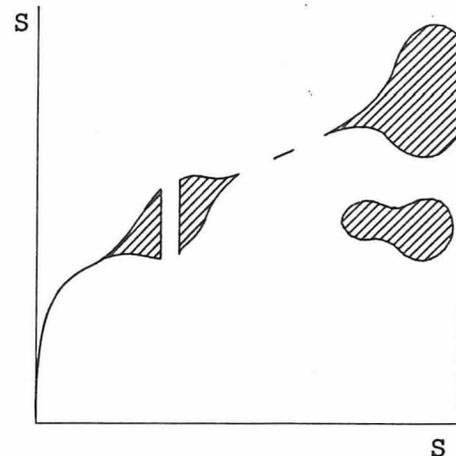
上のことは、構造変動がdeterministicであることを要求している。

以上の2個の要請をSCLに課すことは、科学的にもきわめて妥当なことである。この2

個の要請をみたすSCLは、SからSへの一義の対応、写像である。このことは、われわれのダイアグラムによれば、S×S内の1本のグラフのようにあらわせる。第3図はこの2個の要請を満足するSCLの例を、第4図はそうでないSCLの例をそれぞれ示している。



第3図：全域的で一義的なSCL



第4図：全域的でも一義的でもないSCL

社会構造の変動の一般理論を構築しようとするすべての試みは、以上の2つの要請を満たす写像を発見もしくは演繹することである。(1) Marx

主義の理論では、階級闘争が必ず第2図のようなSCLをみちびくとされる。ではSFTではどうか。

(1) われわれは、ここで比較静学(Comparative Statics: 略称CS)の技法について一言述べなければならない。CSはたしかに社会の変動を説明する。しかしわれわれはCSを構造変動を説明する一般的な技法とはみとめがたい。理由は以下のとおり。

GETにおけるCSは、外生変数(与件)の変動に応じて内生変数の変動を説明する。外生変数のある状態のもとで1個の均衡点が存在し、別の状態のもとではまた別の均衡点が与えられる。このとき外生変数は定義によってわれわれの社会構造 $\omega$ (あるいは $\omega$ の成分)である。つまりCSの技法は構造の変動に応じて均衡点の変動を説明するにすぎない。

SFTの第2段階は、構造変動に関する一般的な規則を提出しようとするものであった。SFTにとって構造変動は、説明されるべきものであって、説明に用いられるものではない。ところがCSは「単に構造が変化すること」を述べるだけで、その構造変動がどうもたらされるのか、あるいはどんな内容なのかについて何も述べない。

4. SCHの不可能性

すでに述べたように、SFTは機能要件FRを理論装置の一部としている。SFTの論理を検討する際みたとように、FRは構造変動を説明(ないし予測)するため、つまり動学的説明のために要請された概念であった。また、FRが存在すること、構造空間Sに線型順序Lを与えられていることは等価であった。

一方、構造変動の一般理論を構成することは、直積集合 $S \times S$ の部分集合として1本のグラフSCLを与えることである。

では、SFTの立場にたつて、FRを用いてSCLを与えるとは、いったいどのようなことであろうか。これを説明することが、SFTの方法論的独自性をも、難点をもあきらかにするであろう。以下順に考察していくことにする。

追加的手続きの必要性

まずはじめに述べることは、それ自体十分におどろくべきことである。

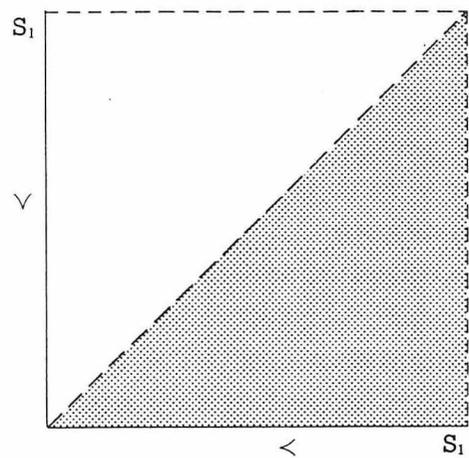
7 c ( LとSCLの無関係性 )

Sの要素が1個以上のとき、Sで定義される線型順序Lは、それだけでは5aと6aをみたすSCLを与えない。

FRが存在することは、Sで線型順序Lが定義されるのと同様であった。それゆえ、上の言明はFRの存在とSCLとが無関係であることを示している。FRが存在することは、そのままではなんらSCLをみちびくものではない。

このことは、 $S \times S$ ダイアグラムに線型順序Lを図示してみれば簡単にあきらかとなる。線型順序もSCL同様、直積集合 $S \times S$ の部分集合としての表現をもっていた。いま、FR<sub>1</sub>という機能評価が与えられ、Sにも線型順序L<sub>1</sub>が与えられたとする。Sの要素をその線型順序によって整列させ、S<sub>1</sub>とする。Sに与えられた線型順序はS<sub>1</sub>×S<sub>1</sub>のダイアグラムの下三角形(ただし対角線要素はふくまない)であり、第5図のようにあらわされる。これは第3図のSCLとは遠くへだたったものであり、似ても似つかない。直観的にあきらかであろう。

この帰結はきわめて重大である。FRの存在



第5図：線型順序

はそのままではSCLを与えない。ところがSFTのSCHは、FRからSCLを成しななければならない。それゆえ、次のようにいわねばならなくなる。

8 a (追加的手続きの必要性)

SFTのSCHには、線型順序Lに関連させて、SCLを特定する手続きが必要である。

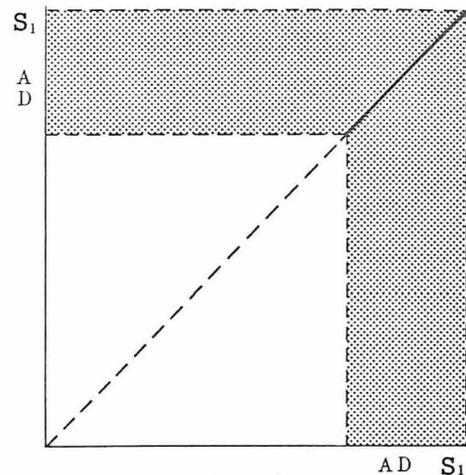
SCLを与えるための手続きをPとしよう。数学的な表現をとればPは次のようなことを意味する。

$$SCL = P \times L \quad (5)$$

Pは線型順序Lに応じてSCLを特定する。この手続きは、理論家が通常は全く自明としている仮定、それゆえ暗黙の仮定なのである。具体的には「社会はだんだんよくなる」とか「だんだん悪くなる」などと述べることを意味している。それゆえ、PはSFTのSCHにとっては、暗黙の仮説、または追加的な仮説なのである。

る。このような仮説があってはじめてSCLを有意義に構成することができる。

こうしてみると、前に述べた許容域ADの考え方は、このPという手続きの一部を構成するものということができよう。線型順序が与えられると、 $S \times S$ の対角線要素をSCLの一部としてわりあてるから(第6図)。



第6図：AD

Pの順序依存性

Pの性質について検討しよう。

SFTは動学的な説明を行うためにFRを要請した。SFTが動学的な説明のために明示的に要請した概念はFRのみであり、Sに与えられた線型順序のみである。SCLを有意義に与えるのに必要な暗黙の仮説をPとしたから、Pは、Sに与えられた線型順序のみに依存してSCLを特定するものでなければならない。

このことはきわめて重要なので、例をあげて説明しよう。

いま、構造空間Sが3個の要素 $s^1, s^2, s^3$ からなっているとす。このSに $s^1 > s^2 > s^3$ という線型順序を与える( $s^1$ が1番よく、 $s^2, s^3$ が続く。推移律によって $s^1 > s^3$ であるこ

とも注意)。1個の手続きP<sub>1</sub>によって、いま $\{(s^3, s^2), (s^2, s^1), (s^1, s^1)\}$ というSCL<sub>1</sub>がみちびかれたとする。

このとき、同一の手続きP<sub>1</sub>はそのまま保存して、いまと異なる線型順序 $s^3 > s^1 > s^2$ が与えられたとする。P<sub>1</sub>が線型順序のみに依存してSCLを定めるとするならば、今度は $\{(s^2, s^1), (s^1, s^3), (s^3, s^3)\}$ というSCL<sub>2</sub>がみちびかれなければならない。SCL<sub>1</sub>もSCL<sub>2</sub>も、それぞれの線型順序のもとでP<sub>1</sub>によって、第3位は第2位へ、第2位は第1位へ、第1位はそのままにとどまる、という変動を示している。線型順序のみに依存するとは、このように第1位、第2位、第i位を実際にどんな構造が占めるかに依存せず、線型順序中の2個の位置を結びつけることを意味しよう。

構造空間Sに与えられた線型順序は、互いに線型順序内の要素を置換することによって変換可能である。つまり、P<sub>1</sub>という手続きがある線型順序のもとにSCLをわりあてることのできるならば、そのP<sub>1</sub>はどんな線型順序が与えられても、適宜にSCLをわりあてることのできる。こうしたPがあつてこそSFTのSCHは完成するのではないか。

より厳密に、以上のことを表現すれば次のとおり。

9 a (Pの順序依存性)

ある線型順序のもとで $(s^1, s^2)$ なる構造変動を与えるPは、 $s^1, s^2$ をそれぞれ任意の $s^3, s^4$ ととりかえるような線型順序の変換にたいして、 $(s^3, s^4)$ の変動を与える。

ところが、われわれはこのPを要請することが、SFTのSCHを成り立たせなくなるこ

を次に論証する。

SCHの不可能性

いままたように、Sに与えられた線型順序は、それだけでは少しも構造変動の一般的規則SCLを特定できなかつた。そこで線型順序をもとにしてSCLを特定する手続きPを要請し、そうすることによってSFTのSCHが完成するかにみえた。

いまこのPの性質についてよく考えてみる。Pは、ある構造にたいして、それがSに与えられた線型順序の上で占める位置にのみ注目して、特定の位置を占める構造をわりあてる働きをしている。比喩的にいうならば、Sの要素を1列にならべて、何番目にあるかによって、要素を特定の順位にわりあてるものであった。つまりPは線型順序の上の2つの位置を、それをどんな構造が占めるかには関係なく結びつけているにすぎない。

このとき、1個の線型順序の上の2つの特定の位置が結びつけられなければならない必然性は、SFTの他のどんな論理からも要請されない。なぜならば、FRとPだけが動学的な道具立てとして要請されているからである。いま、線型順序を1個に固定して、2つのPが次のように与えられたとしよう。P<sub>1</sub>は第十位の構造に第九位の構造をわりあてる。P<sub>2</sub>は同じく第十位に第五位をわりあてる。この2つのPの主張は、どちらも十分にもっともらしく納得しやすいと同時に、どちらも線型順序の上の2つの位置を結びつける恣意的な規則にすぎないという点で全くかわりがない。

問題は、「線型順序に依存して」具体的にSCLを確定することであり、どんなPを要請してもそれは可能であるから、以下のようにいえる。

10 a ( P の任意性 )

P は、一義的な SCL を保証するものであれば、任意のものでよい。

この言明は、P のきわめて重要な性質をあらわしている。

さて、どのような P も、一度与えられたならば、S の要素の置換によって与えられる任意の線型順序にたいして、SCL を確定するように働く。このことは、9 a ( P の順序依存性 ) より簡単に得られる帰結である。P にとって、S の要素の置換によって与えられる任意の線型順序は、単に線型順序であるという意味しかもない。それゆえ P はある特定の線型順序を排除できない。

以上述べたことを前提にすると、次のようなことがあきらかになる。

11 c ( SCL の重複 )

S に 2 個以上の要素が属するとき、S に与えられた線型順序  $L_1$  と  $P_1$  が構成する SCL を与える、別の  $L_2$  と  $P_2$  の組が必ず存在する。

つまり、ある線型順序とある P が与える SCL は、いつでも別の線型順序と別の P によって作ってしまう。

このことは 9 a と 10 a を用いて簡単に証明できる。いま  $L_1$  と  $P_1$  のもとで確定した SCL<sub>1</sub> があるとしよう。  $L_1$  を置換によって  $L_2$  という別の線型順序におきかえる。P は SCL を一義的に与えるものならば任意に構成できたから、  $L_2$  のもとで SCL<sub>1</sub> を与えるような  $P_2$  は必ず存在する。つまり SCL<sub>1</sub> は線型順序の変動にたいして保存される。同様 P の変動にたいしても SCL

L は保存される。しかもこのような L と P の組は、S に与えられる線型順序のつけかえ方の個数だけ発見できる ( 第 1 表を見よ )。 Q. E. D. 問題は、SFT の SCH が真に線型順序に依存して SCL を構成しうるか、であった。上の帰結はそれについて否定的な答えを与える。以下説明しよう。

まず第 1 に、上の帰結の解釈を述べよう。SFT の SCH は、構造空間 S に与えられた線型順序に応じて具体的に SCL を確定しようとするものであった。しかし線型順序 L が存在するのみでは SCL を確定できず、P という暗黙の手続きを必要とした。ところが上の帰結によれば、P を要請するとき、ある 1 個の SCL が 1 個の線型順序によって与えられたものとは判定できない。というのは、線型順序 L と同時に手続き P を適当に変化させることによって同一の SCL がえられるから。

いま SCL<sub>1</sub> が与えられたとし、それは  $L_1$  と  $P_1$  によって与えられたものとしよう。存在するのは ( どちらも仮説として提出される )  $L_1$  と  $P_1$  の「組合わせ」であって、SCL<sub>1</sub> が  $L_1$  によってもたらされたとも  $P_1$  によってもたらされたともいえない。しいて述べるならば、SCL<sub>1</sub> は  $L_1$  と  $P_1$  の「組合わせ」という仮説によってもたらされたのであり、L も P も単独でその妥当性を確かめえない ( 反証の可能性がない )。

L と P の「組合わせ」というものは、常に 1 個の SCL という仮説に等しい。ところが上の帰結によれば、1 個の仮説 SCL<sub>1</sub> に等しい L と P の「組合わせ」は常に多数存在する。それらの複数の「組合わせ」はすべて 1 個の SCL<sub>1</sub> に等しいということによって同一視されねばならない。

L と P の「組合わせ」を要請することは、SCL を与えるのに常に冗長なことであり、そうすることによって検証 ( あるいは反証 ) 可能な

言明を産出する能力は少しも高まらない。すでにたてた規準 4 a ( 簡潔性の規準 ) に抵触する。

さて、こう考えると第 2 に、SFT の SCH は、L と P を要請して何をしていたのかが問題となろう。L も P も SCL を与えるという点に関して冗長なものであった。ところがこの冗長な概念の組こそが、SFT の SCH をもっともよく特徴づけていたのではないか。理論の identity が、すべて理論的産出能力にとって冗長な部分にもとめられるような理論は、1 個の独自の方法をもっているとはいいがたい。<sup>(1)</sup>

第 3 に、S × S 内に SCL をわりあてる作業は、どんなものであろうと結局先験的に 1 個の SCL を与えることに等しいものであった。S × S 内にどんな SCL が構成しうるかは、S を定めたときにすでに定まっている。SCL を定める原理が存在しなくとも、先験的に 1 個の S

CL を定めることは可能である。

ところが、先験的に SCL を定める、ということは、GET の SCH になっている。なぜならば、GET にはいかなる一般的な構造変動の原理もなかったから、どんな SCL を採用しようとも SCH として GET の論理と矛盾しないからである。

こうして、SFT は必然的に GET の段階まで後退すべきことはあきらかである。

(1) FR を GET の外にたてるのが認められるとすれば、その外に「神」を、さらにその外に「神の神」をたてることも許されよう。そうして、それらの概念の名称をもってその理論を特徴づけることも可能である。しかし何がうみだされるのか？ SFT は GET の外側に不要な道具だてを 1 個つけ加えただけである。

表 1

線型順序 P	$x > y > z$	$x > z > y$	$y > x > z$	$y > z > x$	$z > x > y$	$z > y > x$
3 → 2 → 1	$z \rightarrow y \rightarrow x$	$y \rightarrow z \rightarrow x$	$z \rightarrow x \rightarrow y$	$x \rightarrow z \rightarrow y$	$y \rightarrow x \rightarrow z$	$x \rightarrow y \rightarrow z$
3 → 1 → 2	$z \rightarrow x \rightarrow y$	$y \rightarrow x \rightarrow z$	$z \rightarrow y \rightarrow x$	$x \rightarrow y \rightarrow z$	$y \rightarrow z \rightarrow x$	$x \rightarrow z \rightarrow y$
2 → 3 → 1	$y \rightarrow z \rightarrow x$	$z \rightarrow y \rightarrow x$	$x \rightarrow z \rightarrow y$	$z \rightarrow x \rightarrow y$	$x \rightarrow y \rightarrow z$	$y \rightarrow x \rightarrow z$
2 → 1 → 3	$y \rightarrow x \rightarrow z$	$z \rightarrow x \rightarrow y$	$x \rightarrow y \rightarrow z$	$z \rightarrow y \rightarrow x$	$x \rightarrow z \rightarrow y$	$y \rightarrow z \rightarrow x$
1 → 3 → 2	$x \rightarrow z \rightarrow y$	$x \rightarrow y \rightarrow z$	$y \rightarrow z \rightarrow x$	$y \rightarrow x \rightarrow z$	$z \rightarrow y \rightarrow x$	$z \rightarrow x \rightarrow y$
1 → 2 → 3	$x \rightarrow y \rightarrow z$	$x \rightarrow z \rightarrow y$	$y \rightarrow x \rightarrow z$	$y \rightarrow z \rightarrow x$	$z \rightarrow x \rightarrow y$	$z \rightarrow y \rightarrow x$
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮

\* P の構成法としては、1 → 2 ← 3 のようなものも考えられるが省略した。

5. 結 論

以上の考察からわれわれのえた結論は、①SFTのSCHはあいまいなものであり、②FRの概念にもとづいて有意義にSCHを構成しようとするGETと同等の性能をもちながら必ずより冗長なものとなり、③SFTのidentityはその冗長な部分にあるため、④SFTはGETの水準にまで後退を余儀なくされる、というものである。

このような結論は何を意味するのか？ われわれの与える解釈は、(1)SFAはSFTの前駆形態であり、(2)現在流布しているどんなSFAといえども、理論的内実を形式的に整理してゆくならばSFTに帰着する。それゆえ、(3)SFTがSCHにおいて行きづまるならば、現在の努力をいかに続けようとするすべてのSFA

もまた決して完成に達することはありえず、(4)SFAが通常科学になるということは錯覚である。また、(5)従来SFAがうみだしたとする経験的に検証可能な仮説は、本来はSFAの手続きに本質的にかかわるものではない(おそらくGET=構造論にかかわるものであろう)。

SFTは、GETとはたかだか同じ性能をもつにすぎないのに、GETより複雑な道具だてを備えている。簡潔性の規準に照らしてGETに優越するものではなかった。それゆえ、SFA的な発想による理論的試みは、すべてFR概念を排除して、GET的に再構築されるべきである。むしろGETにも種々の難点があるが、SFTのSCHのもつ困難をみるならば、われわれはとりあえず、理論的作業をGETの水準で行わなければならない。

\*  
\* \*  
\*

略 記 号 表

略記号	初出	略記号	初出
a (命題のあとに付して)	156	P 追加の手続き	162
仮説		R 弱順序	156
AD 許容域	156	∞ 社会構造	155
c (命題のあとに付して)	161	S 構造空間	156
帰結		SCH 構造変動仮説	153
CS 比較静学	161	SC L 社会構造変動の法則	160
EKV 拡張小室版	154	SFA 構造-機能分析	152
FR 機能要件	155	SFT 構造-機能理論	154
GET 一般均衡理論	155	x 社会状態	155
L 線型順序	157	X 社会状態空間	155

文献表

青井和夫(編) 1974 『社会学講座1 理論社会学』, 東京大学出版会。  
 Arrow, Kenneth J. 1963 Social Choice and Individual Values (2nd ed.), Yale Univ. Press. =1977 長名寛明訳, 『社会的選択と個人的評価』, 日本経済新聞社。  
 Bredemire, Harry C. 1955 "The Methodology of Functionalism", American Sociological Review 20: 173-180.  
 Buckley, Walter 1957 "Structural-Functional Analysis in Modern Sociology", Becker, H. & Boskoff, A. (eds.), Modern Sociological Theory: 236-259. Holt, Rinehart & Winston.  
 Bunge, Mario 1959 Causality: The Place of the Causal Principle in Modern Science, Harvard Univ. Press. =1972 黒崎宏訳, 『因果性—因果原理の近代科学における位置』, 岩波書店。  
 Etzioni, Amitai 1961 A Comparative Analysis of Complex Organizations, The Free Press. =1966 綿貫謙治監訳, 『組織の社会学的分析』, 培風館。  
 Fallding, Harold 1963 "Functional Analysis in Sociology", American Sociological Review 28: 5-13.  
 長谷川公一 1979 「主体システムの意思決定モデル」, 『ソシオロギス』3: 40-52。  
 橋爪大三郎 1978 「構造=機能理論の射程と限界」, (未発行)。  
 Hempel, Carl G. 1965 Aspects of Scientific Explanation, The Free Press. =1973 長坂源一郎訳, 『科学的説明の諸問題』, 岩波書店。  
 廣瀬 和子 1970 『紛争と法—システム分析による国際法社会学の試み—』, 勁草書房。  
 小室 直樹 1967 「構造機能分析の原理—社会学における一般分析理論構築の準備」, 『社会学評論』18-3 (71): 22-38。  
 ———— 1974 「構造機能分析の論理と方法」; 青井(編) [1974: 15-80]。  
 Malinowski, Bronislaw 1944 A Scientific Theory of Culture, The Univ. of North Carolina Press. =1958 姫岡勲・上子武次訳, 『文化の科学理論』, 岩波書店。  
 Merton, Robert K. 1957 Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research (revised ed.), The Free Press. =1961 森東吾他訳, 『社会理論と社会構造』, みすず書房。  
 直井 優 1973 「構造-機能分析の展開—社会学における通常科学への途—」, 『思想』587: 31-50。  
 Parsons, Talcott 1951 The Social System, The Free Press. =1974 佐藤勉訳, 『社会体系論』, 青木書店。  
 ———— 1954 Essays in Sociological Theory (revised ed.), The Free Press.  
 ———— 1961 "An Outline of the Social System", Shils, E. et al. (eds.) Theories of Society: 30-79. The Free Press. =1978 倉田和四生訳, 『社会システム概論』, 晃洋書房。  
 Radcliffe-Brown, Alfred R. 1952 Structure and Function in Primitive Society, Cohen and West. =1975 青柳まちこ訳, 『未開社会における構造と機能』, 新泉社。  
 Rudner, Richard S. 1966 Philosophy of Social Science, Prentice-Hall. =1968 塩原勉訳, 『社会科学の哲学』, 培風館。  
 志田基与師 1979 「構造-機能理論の説明形式: 方法的再考」(未発表)。

—— 1980 「機能理論の説明形式」：『ソシオロギス』4：112-125.

富永 健一 1965 『社会変動の理論——経済社会学的研究——』, 岩波書店.

—— 1975 「構造と機能」, 富永・塩原(編) [1975: 54-74].

富永 健一・塩原 勉(編) 1975 『社会学セミナー1. 社会学原論』, 有斐閣.

恒松 直幸 1978 「貨幣 メディア論の視角から」(未発表).

安田 三郎他(編) 1981 『基礎社会学 第V巻 社会変動』, 東洋経済新報社.

吉田 民人 1974 「社会体系の一般変動理論」; 青井(編) [1974: 189-238].

Zetterberg, Hans L. 1966 On Theory and Verification in Sociology (3rd. ed.),  
The Bedminster Press. =1973 安積仰也・金丸由雄訳, 『社会学的思考法——社会学の理論と証明』, ミネルヴァ書房.

付記：本論執筆にあたって、高木英至氏および田代秀敏氏より貴重なコメントをいただき、論文を大幅に改良することができました。また特に名をあげませんが小室ゼミナールの方々をはじめ多くの人々からもコメントをいただきました。以上の方々に深く感謝いたします。

(つねまつ なおゆき)

(はしづめ だいざぶろう)

(し だ き よ し)

東京都文京区本郷1-8-1 千113-91 ☎03-813-4511代

**有信堂**

82年2月刊行予定

**現代社会学辞典** 大項目主義による体系的 sociology 辞典

監修/北川隆吉 編集委員/佐藤守弘・三溝信・副田義也・園田恭一・中野収 執筆者/厚東洋輔・稲上毅・矢沢修次郎・井上俊・森博・庄司興吉・蓮見音彦・古城利明・細谷昂ほか、計36名の執筆陣が討議をかきこんだ本格的辞典

81年10月刊行開始予定

**地域社会の構造** 分析シリーズ 全10巻 別巻1

1 北海道(笹森秀雄編) 2 東北(田原音和編) 3 関東(山手茂編)  
4 東京(奥田道大編) 5 京浜京葉(柳下勇編) 6 東海(中田実編)  
7 北陸(岩男耕三編) 8 近畿(杉之原寿一編) 9 中・四国(八木佐市編) 10 九州(鈴木広編) 別巻(北川隆吉・蓮見音彦編)

福武直編 **社会学(第二版)** 好評発売中

★激動する国際自動車業界の裏面を抉る!  
**晴れた日にはGMが見える**

世界最大企業の内幕  
J・P・ライト著  
風間禎三郎訳  
●四六判/1700円千300

★強いアメリカの核心をとらえた!  
**ザ・ウォーモンガーズ** 戦争仕掛人

第三次大戦は始まっている  
H・S・カツツ著  
青木榮一訳  
●四六判/1700円千250

一九八一年、でなければ一九八五年と予告する、世界大戦勃発の危険性。その裏には影のような戦争仕掛人の姿がある。その実体を暴き、警鐘を鳴らすドキュメント。

ダイヤモンド社  
〒100東京都千代田区霞が関1-4-2 ☎03(504)6515

日本評論社

**人間の自己創造** 久野 収 <日評選書> 一三〇〇円

民主主義は国民が主権者となる権利と方法を保障しているが現実には「市民」は「死民」となりやすい。つねに行動する市民として人間の生き方を問いつづける著者はいま情報公開を求める運動に立ち上った。本書は時論において第一人者たる久野収の人間復権に関する評論集。

**近代の崩壊と人類史の未来** 沖浦和光著 一七〇〇円

〈千160〉 東京新宿須賀町/振替・東京0=16番

日本経済新聞社

**社会的選択と個人的評価** ケネス・J・アロー著/長名寛明訳……………1600円千250

**不平等の経済理論** アマーテア・セン著/杉山武彦訳……………1500円千250

**成長の社会的限界** フレッド・ハーシュ著/都留重人監訳……………2200円千250

**社会システム論** 公文俊平著……………1500円千250